

信州の里山利用の歴史

中堀 謙二

伊那谷北部の里山の歴史

伊那谷では飯田市蛙沼(標高1060m)の花粉分析から、鎌倉時代に沼の周辺で焼畑の存在が確認された。江戸時代にはいり、江戸や大坂など大都市建設に莫大な木材が、特に優れた耐水性をもつサワラ等が屋根材や桶材用に樽木の形で天竜川を通して運ばれた。

領主によるこの森林伐採により17世紀前半には山地の大木は乏しくなり、その後は農民による山の利用が激しくなった。すなわち17世紀後半各地で新田開発が行われ、馬飼育による厩肥生産が始まり、秣場が天竜川両岸の複合扇状地面や山地に拡大した。山の利用はさらに刈敷や落葉落枝、薪炭材や屋根材料の萱、公共用材採取に及び、入会山では持続的利用が工夫された。農民による山地利用は18世紀初頭に温帯域の上限高に達し、山々には高木が乏しく低木林と草地の多い風景が広がったと思われる。

明治半ばになると山の利用法が大きく変化した。レンゲが緑肥として導入され、また養蚕業で現金収入を得た農家が金肥を使用し始めたため厩肥生産が減少し、複合扇状地上の採草場が放棄された。その放棄地にカラマツやアカマツやナラ類の植林が始まり平地林が形成された。また大正時代には森林の乏しい公有林野に行政による造林も行われた。

戦後は食料不足解消のため平地林の多くが農地に転換した。一方、肥料が自給肥料から化学肥料へ、燃料が薪炭から化石燃料へと変化したため、山地の刈敷山や採草場や薪炭林の利用が廃れそこにカラマツの植林が進んだ。地域の資源が価値を失い人々の生活が地域外資源へ依存する中で上伊那に山々が針葉樹林で覆われる風景が出現した。この用材生産に特化した針葉樹林には日常的利用がなく放置されて、低木類や亜高木類が侵

入し森林の階層構造が発達し、落葉落枝により土壌が発達し水源涵養機能が向上してきている。

1970年に国内で消費する木材量は外材が国産材を上回った。以降、外材輸入量の増加と木材代替材料の普及で地域森林の物的資源としての価値が低下し続け、平地林の工場用地への転換が進んだ。残った平地林は木材生産を図りながら森林公園としてレクリエーションに利用したり、環境教育に利用したりと、環境資源としての活用がはかられてきている。

里山利用法の地域差

昭和30年代まで地域住民は里山から様々な資源を得てその持続的利用に努めてきたが、里山の利用法は地域により違いがあった。

耕作地面積が広い伊那や八ヶ岳山麓の農業地域では、大量の肥料を必要とし、山では水田用の刈敷と、馬の餌用の朝草刈り、秋草刈りが行われた。草は重要資源であり土壌の厚い緩傾斜地を採草地とし、草が生えない岩礫の多い土地を薪炭林として利用した。

高遠のような耕作地面積が狭い山間地では、狭い田畑に隣接する山裾の、土壌の乏しい急斜面を刈敷山、そしてその奥を薪炭林とした。薪や炭といった商品生産のため広大な薪炭林が土壌豊かな山地に成立していた。採草地は集落から遠く離れた平坦地であった。

諏訪地方は厩肥生産中心の山浦地域と金肥を導入した諏訪地域に分かれる。山浦地域は八ヶ岳西山麓にあり広大な採草地を利用し馬を多数飼い厩肥を生産し肥料を自給していた。一方、諏訪地域は諏訪湖周辺の村々からなり原野が少なく肥料に金肥を導入の必要があり、生糸や氷豆腐など商品生産を行っていた。農耕地2haを厩肥で維持するには馬1頭が必要であるが、馬の飼育に必要な採草地が諏訪湖周辺の村々には不足していたからである。